

# 甬島の歴史・文化資源と その活用

—歴史・文化資源を1000年後にまで残すために—

佐藤 宏之(SATO Hiroyuki)  
鹿児島歴史資料防災ネットワーク  
<http://kagoshima-shiryounet.seesaa.net/>  
kagoshima.shiryounet@gmail.com

2018/11/27

## ▶ ふるさとの記憶がなくなる？

- 1993.8.6 8.6水害
- 1995.1.17 阪神・淡路大震災
- 2004.10.23 中越地震
- 2010.10.18 奄美豪雨
- 2011.1.19 新燃岳噴火
- 2011.3.11 東日本大震災
- 2015.5.29 口永良部島新岳噴火
- 2015.8.24 台風15号(三島村)
- 2016.4.14 熊本地震
- 2018.6.28 西日本豪雨
- 2018.9.6 北海道胆振東部地震

## ▶ ふるさとの記憶

### • 人びとがそこで暮らし、生きてきた証拠

- 古文書(くずした文字で和紙に書いたものなど)
- 古い本(和紙に書かれて冊子にしてあるものなど)
- 明治・大正・昭和の古い本・ノート・記録(手紙や日記など)・新聞・写真・絵
- 古いふすまや屏風(古文書が下貼りに使われている場合がよくある)
- 自治会などの団体の記録や資料
- 農具、機織りや養蚕の道具、古い着物など、物づくりや生活のための道具など

⇒歴史文化資料:社会との関わりのなかで作成される地域の記憶・地域の履歴書

## ▶ ふるさとの記憶がなくなる？

### • 2015.8.24・25 台風15号による被害状況

-三島村黒島:全壊3, 半壊16, 一部損壊22

(鹿児島県危機管理防災課「台風15号による被害状況」9月11日15:00現在)

片泊地区の菅尾神社・恵比須神社(10.6)



棟札8点(最も古いもので文政3年<1820>)、王面

▶ ふるさとの記憶がなくなる？

- ・ 2016.4.24 宮崎市旧城ヶ崎地区資料レスキュープロジェクト  
宮崎歴史資料ネットワークと連携



▶ ふるさとの記憶がなくなる？

- ・ 2017.4.2 いちき串木野市で資料レスキュー



▶ ふるさとの記憶がなくなる？

- ・ 個人が所有する歴史文化資料
  - 政治的変動、災害(戦災・自然災害)、修史・編纂、他文書の流入などから守り伝えられてきた資料
  - 地域の歴史を語る公的な資料
  - どこに資料が集まっているのか／構造上の問題を把握する
- ・ 消失の危機
  - 資料の価値／わからない or 知らない or 軽視 or 無視
  - 資料の盗難
    - ・ 地元で管理するにはマンパワー、資金、見識が不足
  - 人の移動
    - ・ 地域社会が本来的に持っていた地域歴史資料を保全する機能が失われている

▶ ふるさとの記憶がなくなる？

自然環境の変化

- ・ 地震
- ・ 津波
- ・ 集中豪雨
- ・ 噴火 etc.

歴史環境の変化

- ・ 急激な人口移動
- ・ 高齢化
- 代替わり、家の建て替え、引っ越しetc.

指定文化財を基本  
とした歴史資料保存  
地域住民による保全

地域の歴史資料  
の散逸・滅失

個人や地域を超え  
た歴史文化資料の  
救済・保全活動

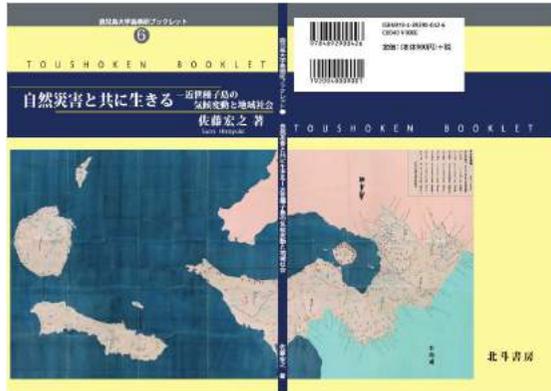




## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

- ・ 佐藤宏之『自然災害と共に生きる(鹿児島大学島嶼研究ブックレット6)』(北斗書房、2017年)

-地域の資料を使って自然と向き合ってきた歴史を描く



### 『種子島家譜』

→ 戦災・大火から復元  
⇒ 江戸時代の種子島における気候変動と地域社会の応答

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

- ・ 文化元年(1804)8月

「十三日、家老岩川十右衛門政要・物奉行種子嶋平左衛門政苗・用人種子嶋大兵衛政(ママ)、赤尾木港を発して寛府邸に赴く、今茲吾地水旱蝗風あり、田園荒蕪して、歳大いに饑う(今年、種子島では水害・干害・蝗害・風害があり、田園が荒蕪して、大飢饉となる)、是に於いて家老・物奉行・用人を寛府に召して、親戚及用頼等、常貢を緩くして庶民を救う之事を胥議す」

- ・ 文化2年

「春より秋に至るまで、他國より糶(買い米)して士庶人之飢を救うこと凡そ千百二十二石余なり、且つ家老・醫者を村里に巡察せしめ、飢えを救い病を治すと雖も、死者殆ど千人なり」

←文化期(1800~1820)は、前後200年間で、最も夏の気温が高い時期にあたり(Cook et al.2013)、東北地方をはじめとする本州では、温暖化によって好調な米の生産が続くなど良い影響

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

- ・ 元禄元年8月18日(1688年9月12日)

終日台風に見舞われ、潮水が大いに溢れ出した。この台風は「七八十年來未曾有」のものと認識。海辺の人家は漂流し、849軒が倒れ、170頭の牛馬が死に、大小の船22艘が壊れ、五穀749石余りの被害

- ・ 宝永4年10月4日(1707年11月17日)

地震による津波で、現和村庄司浦(西之表市現和庄司浦)の人家10軒が流失。

= 東海道沖から南海道沖を震源域として発生したM8.6の巨大地震(宝永の大地震)の影響で、この庄司浦で5~8メートルの津波。  
この地震は南海トラフのほぼ全域にわたってプレート間の断層破壊が発生したと推定。

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

- ・ 宝永6年(1709)

台風によって牛馬1,102頭が死亡し、家103軒が倒壊

- ・ 正徳元年7月22日(1711年9月4日)

台風によって男性1名が死亡、771軒が倒れ、45匹の馬が死亡

- ・ 寛保元年7月21日(1741年8月31日)

夜から翌朝にかけて台風による洪水が発生。田地2,265石余、倒れた家2,996軒、死亡した馬114匹、死亡した牛21頭の被害

- ・ 延享3年8月23日(1746年10月7日)

大風・大潮で田地2,160石余が崩れ、流家8軒、倒家58軒、損家105軒、壊れた厩320、死亡あるいは流出した牛馬25匹、大小23艘の船が壊れる被害

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

### ・ 災害への対応力、災害からの復元力

#### -領主の力

- ・「府庫(島の財庫)」からの御救い／領主による救済／さとうきび栽培の奨励／常平倉の設置／民・役人を教導

#### -神の力

- ・雨乞い、虫除け、潮風祈禱、「潮祭」

#### -民間の力

- ・民衆自らの手で日常を回復⇨賞することで、民間の力を活用

#### -主体的に選びとる力

- ・手広な土地があるという地形をいかして、さとうきび栽培を主体的に選びとる

## ⇒災害文化の継承

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

### ・ 鮫島幸明『口永良部島新岳爆発状況の記録』(上屋久町、1966年)

- 「南日本新聞南風録」に依ると、(昭和41年)10月10日から11日にかけて、西日本磯釣クラブの釣大会で130人位が釣を楽しんだが、**硫黄臭い匂いがして、不思議に魚が釣れなかった。**

-白浜にある洞穴は正常は大変涼しい所で、木こりが水を冷やす所であるが噴火直前(2時間位前)は**暑気が強かった。**

-**田代の温泉の付近は無気味に硫黄臭かった。**脇田栄蔵、大山繁雄、日高喜久雄の諸氏が網立てに行って不思議がっていたのは、噴火前1週間位の事である。

-その頃は**ヘビが出て這い回っていた**といわれる。

### ・「今回爆発崩壊せし面積は約百町歩にして樹木は埋没され殊に傾幹急峻なる地勢なるが故に**今後大雨の際は此附近一帯より流出せる雨量のため洪水を起し易く向江濱部落は特に注意を要する事と思はる。**(昭和六年四月十六日記す)」「将来に於ける注意」という指摘

### ・「五月十一日午後より大豪雨のため、向江濱部落は大洪水、午後五時半頃のこと、埋没家屋五棟、流失人家三棟に及びたり。」(安山登『口永良部島噴火の記録』安山登、1967年)と**的中**

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用

### ・ 鹿児島測候所編『口永良部島新嶽の噴火』(鹿児島測候所、1931年)昭和6年4月22日の「噴火日時刻及前兆」

「大正三年一月十二日、桜島大爆発一週間前に鳴動し、舊噴火口数坪、俄然陥没し、硫黄火を噴出したれども、桜島爆発後終熄し、其後は時々鳴響を聞きたれども噴煙なく、**本年三月二十日頃よりゴウ々と云ふ地鳴を屢々聞き、**数日間引続き、**其後は「エンデン」の唸る響きの如き振動を屢々聞き、**山頂にて硫黄採取に従事せし工夫の人体にわ**「ビリク」と感じたることあり、**其後引続き四月二日午前七時頃には地下より突き上げる様な振動を感じ、**全十時正午及び午後三時過ぎ烈しき振動「ゴウ」と云ふ大振動を感じ、**之れ迄の振動より最も著しく、硫黄採取工夫も不安を感じたれども爆発の前兆とも知らず、全午後四時半頃工夫約八十名牛馬約七、八十頭全部下山し終業し、其後即ち午後三時四十分過、全六時四十分過、振動鳴響等引続き、全七時半過ぎ一大音響とともに爆発し、火煙天に沖し黒煙中より電光を見たる者もありたりと云ふ」

→「将来に於ける注意」において、「**過去の歴史に乏しく習性等が明かでないから今後如何に変動するか断定することは出来難い**」と述べる。

## ⇒歴史学が災害研究に携わる意義

## ▶ 地域における歴史文化資料の活用一甕島の場合一

### ・ 正安3年11月21日(1301年12月21日)大風・甕島 北条九代記

「異国船若干着、薩摩国甕島、**大風吹、賊舟逐電記**」

(異国船が数隻、薩摩の国の甕島に着いた。大風が吹き、異国船は忽ち姿を消したとある。)

### ・ 天明2年7月15日(1782年8月23日)大風雨・甕島

「甕島郷士富ヶ尾移住記」(『下甕島村郷土誌』)

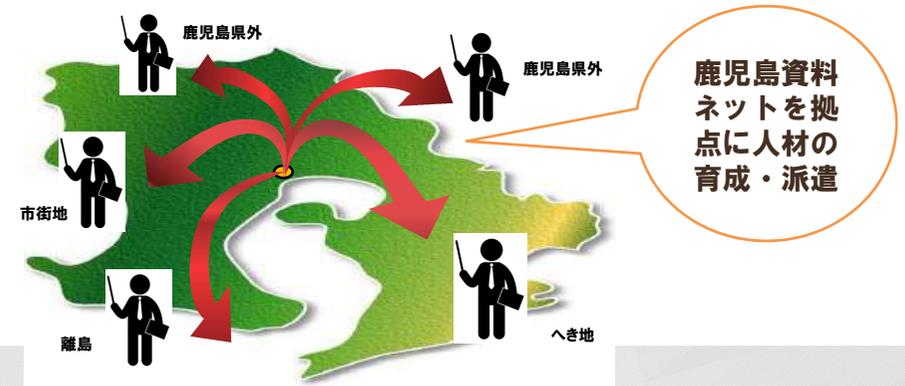
「大風雨片時も止まず、風は大木を折り水は野山まで沖中の如く諸所の堤を破損しあるいは田畑を埋めあるいは洗はぎさる程の**大風洪水**に、我も我もと撰立たる粟、野稲を吹きはぎ、唐芋は桂をも葉は落され、水流畑は川底になり洗いづるはぎもあり、口に言はれず筆に書き及ばぬ痛みなり。田稲も大方穂出まえなりしが二、三日も場所によりては四、五日も水にひたり少々は穂に出でけれども、茅の如くに枯れ捨たり、誠に秋のさびしさは何にたとゆるかたもなし、」

▶ 災害の歴史からなにを学ぶか

- ・ 災害が起った日時・場所・災害の規模など
  - ・ 災害にどう対応したのか、どうやって復興したのか
- ⇒ 当時の人びとは、気候変動に対して、ただ手をこまねいて運命を享受していただけではない。危機に直面して、あるいは危機を予見して、さまざまな短期的・長期的な対策を試みている。
- ・ 洪水→河川工事、干魃→用水路の整備、虫害→防虫、疫病→防疫などによって克服
  - ・ 災害対策のマニュアル化・定式化
- ⇒ かつての経験を活かして自主的に判断する知恵や文化を奪い取ってしまう／自然災害と共に生きてきた事実や文化、復興の過程などの記憶や記録が消滅。

▶ 持続可能な資料保全活動へ

- ・ 資料保全活動の**中核**になり得る人材
- 地域の歴史文化資料を守り、伝えることの重要性を認識している人(資料保全活動のよき理解者)を育む
- 日々失われる資料を少なくすることが可能に



▶ 持続可能な資料保全活動へ



- ・ 過去から未来へ、歴史を継承する人
  - ・ いま、まさに自らの手で「現代」という歴史を作っている人
- 自分自身が100年後、1000年後に**歴史的存在**になるということ
- 将来、「現代」を検証するための資料保全

▶ 持続可能な資料保全活動へ

- ・ **トップダウン型からボトムアップ型へ**
- 多種多様な技能をもつ人びとが集まる
  - 歴史文化資料への関わり方もその人の立場によって多様
- 歴史文化資料に関わる人びとが、互いの関わり方が異なることを理解し合う
- 地域の歴史文化を豊かにするという方向性で大まかに(ゆるやかに)まとまる
- ⇒ **人びとの新しい関係によって、新しい歴史像を切り拓く**